

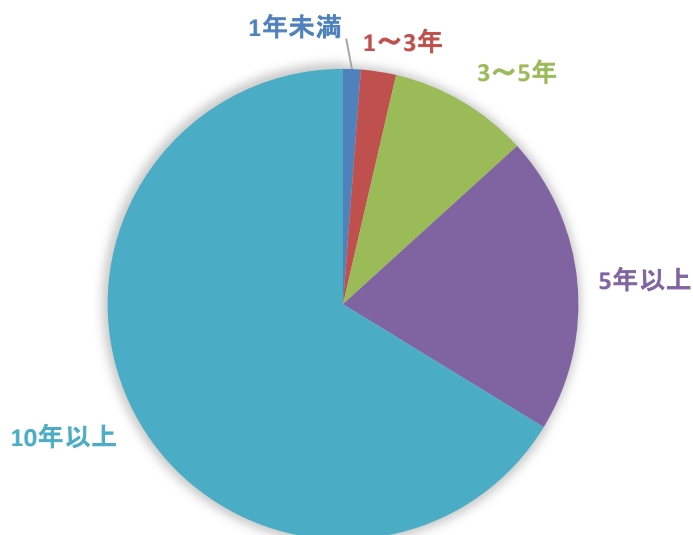
第2回ICFサーベイの結果（概要）

資料5

2017年7月、FDRG事務局より、ICFの認知度や活用度を調査するため、メンバー国にICFサーベイが送付された。当室では、2017年開催した第6回シンポジウムの参加者を中心に当該調査票を配付し、約200人から回収した主な回答の内容を第7回シンポジウムで公表した。その際、回答者の約7割をST（言語聴覚士）が占めていたため、今回、OT（作業療法士）及びPT（理学療法士）に対しても、改めて同様の調査票を配布し、約80人から回答があったので、主な回答結果を以下の通り報告する。

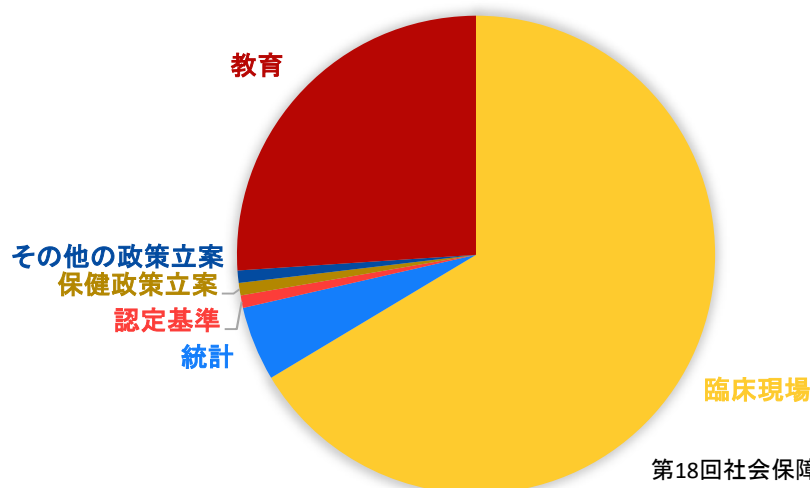
1. ICFの使用歴

ICFを使い始めてからの期間は「10年以上」が全体の7割で最も多く、次いで「5年以上」が2割であった。5年未満の使用歴が約半数を占める第1回サーベイの結果と比較すると、今回は5年以上の使用歴が多数を占めており、全く異なるデータの傾向を示した。



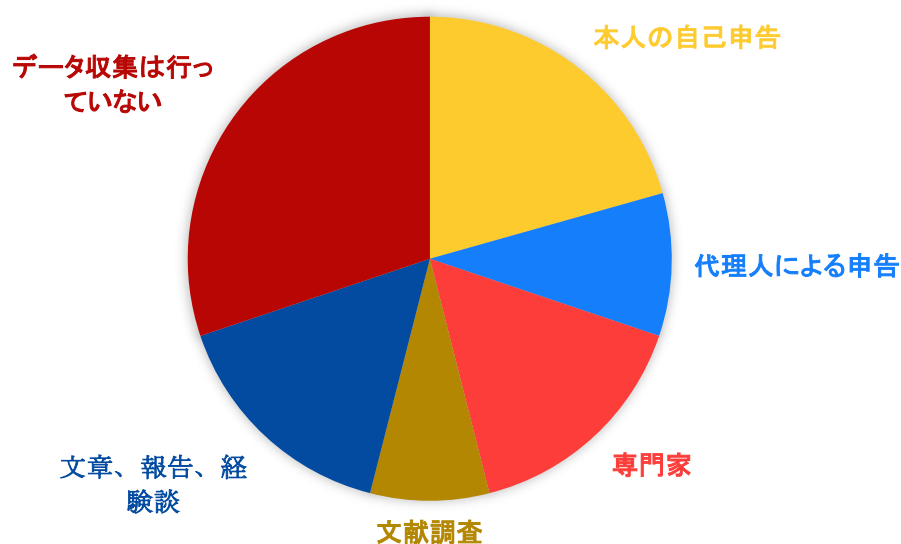
2. ICFの用途

ICFの用途は、「臨床現場」が全体の7割で最も多く、次いで「教育」が3割であった。なお、データの傾向としては前回とほぼ同様であった。



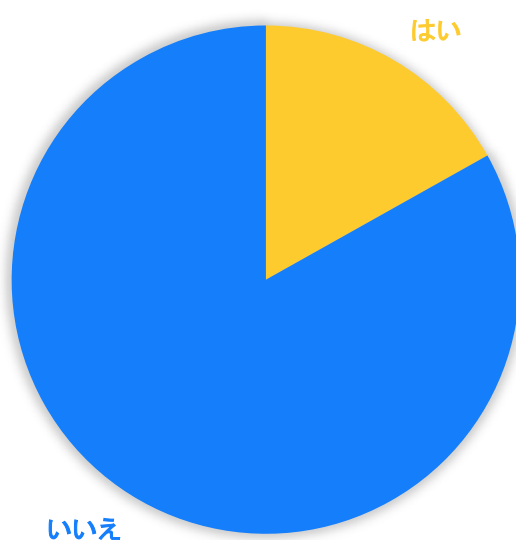
3. ICFデータの収集源

ICFを活用してデータ収集をしている場合のデータソースは、「本人の自己申告」によるものが2割と最も多いが、全体では、「データ収集は行っていない」が3割を占めていた。なお、データの傾向としては、前回とほぼ同様であった。



4. ICF評価点活用の有無

ICF評価点の活用について、実際に活用しているケースは全体の2割を満たさず、ごく少数であった。なお、データの傾向としては、前回とほぼ同様であった。



第7回 厚生労働省ICFシンポジウム

ICF活用で拓く未来社会

～ひとりひとりが輝く未来社会を目指して～

厚生労働省のICFに関する取り組み

著者: 森 桂 (日本WHO国際統計分類協力センター長)

<要約>

厚生労働省では、ICFの普及及び推進を目的に、公開シンポジウム(①)や国内の専門家から成るICF(生活機能分類)専門委員会(②)を社会保障審議会統計分科会の下に組織して運営している。また、本年度は、WHOからの調査依頼に基づき、医療現場等でのICFの利活用状況を把握するためのICFサーベイ(③)を国内に展開し、以下のとおり回答状況を取りまとめたところである。

①当省が主催するICFに関するシンポジウム(タイトル)のこれまでのあゆみ

- 第1回 平成22年1月 共通言語としてのICFの教育・普及を目指して
- 第2回 平成23年1月 共通言語としてのICFの教育・普及を目指して
- 第3回 平成24年12月 実用化に向けた課題と対策について
- 第4回 平成27年3月 共通言語としてのICF普及の新時代を拓く
- 第5回 平成28年2月 環境因子としての支援機器の可能性について
- 第6回 平成29年3月 (ICFの) 具体的活用事例

②当省が事務局として運営するICF専門委員会の委員12名

石川 広己、出江 紳一、井上 剛伸、大谷 俊郎、奥平真砂子、小原 秀和
鎌倉やよい、才藤 栄一、齋藤 秀樹、中村 耕三、橋本 圭司、林 玲子



<シンポジウム会場の雰囲気(第6回)>

③ICFサーベイの結果

本年7月にFDRG事務局より、ICFの認知度や活用度を調査するため、メンバー国にICFサーベイが送付された。当室では、第6回シンポジウムの参加者を中心に調査用紙を配付し、約200人から回答があった。回答者の大半は医療機関に従事している20～40代の者であり、主な回答の内訳は下記コメントと共にグラフにて表示した。

1. ICFの使用期間

ICFを使い始めてからの期間は「5年以上」が全体の3割を超えて最も多く、次いで「10年以上」であった。

2. ICFの用途

ICFを使用する用途は、「臨床現場」が全体の7割を超えて最も多く、次いで「教育」であった。

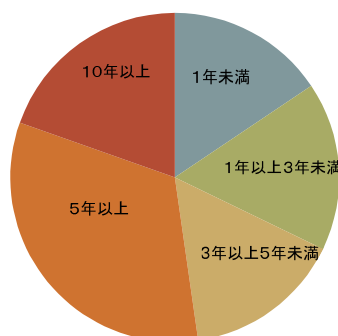
3. ICFデータの収集源

ICFを使ったデータ収集をしている場合のデータ源は、「本人の自己申告」によるものが約2割と最も多いが、全体では、「データ収集は行っていない」が約半数を占めていた。

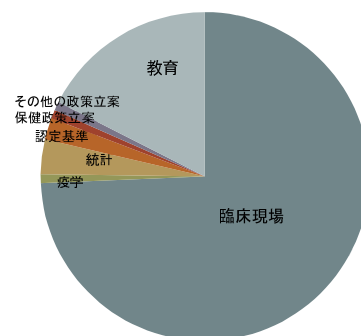
4. ICF評価点の活用有無

ICFの評価点の活用について、実際に使用しているケースは全体の約2割程度と少数であった。

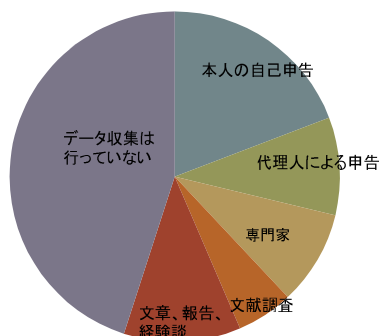
1. ICFの使用期間



2. ICFの用途



3. ICFデータの収集源



4. ICF評価点の活用有無

